

# 「郁達夫と太宰治」の退廃の美をめぐって

惠州学院 蔡雯琪\*

惠州学院 康传金

## 要旨

中日現代文学史上、数々の文学者の間に、微妙な関係を持ったことは事実だ。例えば、郁達夫と太宰治は近代の有名な文学者だ。彼たちは私小説の発展に影響を与えるのだ。彼らの間に多くの類似点がある。

郁達夫は、新しい文学の「五四」時代の創設者だ、近代のロマンチックで、叙情な小説の巨匠だ。その中国の古典の伝統、そして互いに日本文学、参考と組み合わせる。彼の文学作品も、現代日本の私小説の創作に影響を与えた。

太宰治は、近代日本の私小説代表的な作家であると同時に、戦後無頼派魂の人物をと呼ばれる日本文学界の「昭和文学不滅のピラミッド」。

これらは、人間の弱さと醜いに直面し、二人の文学作品は自伝の形に基づいている、彼らは時代の不満と反乱で社会を反映している。

二人の文体は、退廃を主とする。しかし、社会背景と成長環境が違う、退廃的なスタイルを持つ、異なる考えを表現する。

本論文では、家庭環境、教育背景と社会の文化背景に着目し、分析を通して創作の特色と主要な人物の性格特徴、二人文学作品の中に現れた退廃の美の類似性と相違性を探究している。

**キーワード：**郁達夫 太宰治文学作品退廃の美

## 一、互いに異なる社会文化を背景にした似ている人生

郁達夫と太宰治は孤独な存在であり、彼らの作品に深い哲思、複雑な人性解釈が流れている。作家の自分の境遇には創作心理の形成に重要な要素であり、郁達夫と太宰治二つの異なる国籍違う時代の作家にも

似たような人生の境遇がある。彼らはすべて経験した家族の欠乏、愛に渇く、生活の不自由と時代の混乱を待ちかまえて近いと似たような孤独、憂鬱、あまり疑わなかった性格と病態の心理な特徴となっている。

## 1、家庭

末っ子で、郁達夫が生後間もない、栄養失調のために、胃腸病に苦しんでいた。幼いころに父を亡くし、母は忙しいから、時間がなくて面倒を見た。一緒に遊んでくれる人は使用人に誰もいなかった。子供の頃に、塾で本を読んで、年齢が一番若い、体が一番低い、服がぼろぼろ、子供の目には、これらは彼のプライドを非常に傷つける。だから、劣等感を抱えて生きる、郁達夫は中学生時代勉強で、同窓付き合いをほとんどない。「学校の中に、孤独な人間である以上、私の感情、時間とスタミナ、もちろん本を読むくらいしか。」本を買うに郁達夫で唯一の精神を託している。

太宰治は1909年6月19日に青森県の大地主の息子として生まれた、本名津島修治、父親が現地の名士であり、貴族院議員も下院議員務めていた。体が弱い母親が自ら子供の面倒を見ることを出来ない為、十人の子供の中で九人目である太宰は幼い頃から叔母や保母に育てられた。厳しい父親と不在な母親がいるため、彼が子供の時からもう繊細で敏感になっていた。津軽という田舎では有名な豪族だとは言え、太宰家が投機売買と高利貸しで儲けた成金だった。自宅の財産は周りから貧しい農家とそばから搾取の血税を通し、津島家の息子にして罪悪感と優越感が共存した。

## 2、社会

郁達夫で中国が半植民地半封建社会で生活していた時代であり、中国の人民の生活はとても苦痛だ。資本主義が中国を侵略を見た彼は、中国人として、耻を感じる。その時まで、人間が自分自身に目覚め始めている、中国人と外国人が盛んに交際する、いろんな主義やら思想やらが入って来る。新文化運動の先駆者から生命に対して深く体験と反省、個性の解放や自由を呼びかけた。

一方、太宰治は日本の戦后を代表する無頼派の一人。1945年、日本は無条件降伏をした、政治、経済、文化と社会秩序が混迷に陥れた。戦時下にあつて、天皇を中心とする、国家体制作りの基礎を築きた。軍国主義は、彼らの心の支えになっている。「天皇至上」という信念は敗戦によって打破され、人々が彷徨している。軍国主義時代だった、国民の思考を拘束されていた。民主主義の改革になるにつれて、伝統社会の観念と秩序を破れたのである。

## 二、寂しく魂の悲しみと込める

鲁迅は「悲劇は人生の価値あるものを、うちこわして見せる」と言っていた、郁達夫と太宰治の作品の中に、この言葉を最も鮮明に表現されている。死亡と病気に関する話題は、彼らの作品の中に最も多く見えていた、郁達夫が小説の中でわざと主人公の死の結末を語っていた、郁達夫の筆になる「沈淪」の主人公は、国の衰えを非難す、海にとびおりにて死を選んだのは、理想と現実の矛盾を調和ができないから、命を犠牲にして、彼れ自身堅持するべきな価値の理念を守る。太宰治の筆になる「斜陽」に出てくる直治は、第2次世界大戦が終わった後に軍隊を除隊で戻ってきた、毎日何もしない、ただ女と酒に浸りている、最後に、自杀で命を終わらせていた。そして、「人間失格」の主人公として、幼少期より自意識にまみれ、世間とうまくなじめない青年・叶蔵が、不安や迷いを抱えながら、同じく、自杀で命を終わらせていた。

郁達夫の文学作品を見てから、彼は「文学作品はすべては著者自身の自叙伝」と主張する。彼と同じ主張で、太宰治は典型的な私小説作家である。その中から、二人とも個人的に人生経験をそれぞれの作品の素材として、自分の感情、個性、人生を表現を隠すことと思う。そのなかに最も典型的な作品は郁達夫の筆になる「沈淪」と太宰治の筆になる「人間失格」である。

中国から日本への留学生として、「沈淪」の主人公は偏屈で人と交わることができなく。「なんかとても孤独である、寂しい所の中で一人で感じたの孤独感より、肩が触れ合う人ごみの中で感じることのほうがもと辛い」「千キログラムの石が舌根に叩くように、声が突然出せない」と書かれている。彼は日本人の学生に彼を笑うことを時々疑いがでる。この主人公には、郁達夫の化身だ。外国では、自卑感のために、郁達夫は他の世界に入れことも、日本人の同級生の正常な交流ともできなく。彼は日本の同じ年齢の人に成就感の感じはぜんぜんなかった、それで遠い離れを選ぶ。しかし、心の中では、何か狂信的な追い求める。日本の中国への迫害と彼を軽蔑のことを憎し、日本人かに認めてもらいたい。このような矛盾した気持ちで、彼は苦しみで、落ちていた。

一方、「人間失格」の主人公大庭叶蔵の姿は太宰治自身とほぼ同じで。太宰治は自分の悲惨な人生と敗北の経歴を手本にしたが、読者に彼の仮面の背後の姿に明らかに示す。自分が自分を疑えて、分析するのは自虐的な程度に達している。自分の人生について、彼は「生まれて、すみません」と語ったことがある。しかし、彼に描かれたのは決して彼一人の人間の悲しいなんだ、現代人の様々な弱点方は絶えず表出されている、例えば、虚偽、浅い、软弱、利己、猜疑、嫉妬、退廃。繊細な神経と子供のように純真さを

持つ彼を人生のさまざまな矛盾はまったく抵御できない。だから、彼はいつも思案をめぐらして、酒と女とモルヒネ、そして左翼の思想に逃走し。このままで、彼は麻痺と分裂の中で生き残った。死亡への道よりほかには、もうどこも逃げ場はないのことを気が付いまで。

### 三、退廃美の類似性と相違性

#### 1、零余者とアウトサイダー

郁達夫は「自叙伝」がの形で零余者を描写した—「五四时期」の若い知識人、同じアウトサイダーとして、零余者は敏感すぎて、迷って、閉じ込めた人間だ。彼らの思考や感情は中国文化の影響を強く受け、しかし、「五・四」運動の到来で、民众の覚悟が冴える。彼の作品の主人公は絶対に自分の精神苦境の化身である、自分が強い拷問に「五四運動」の知識人の精神世界を探検した。例えば、「鶯蘿行」の「私」、「銀灰色の死」のY君も、「彼女は弱い女」の郑秀岳と呉一粟は、典型的な零余者である。零余者はこの社会に対する深くの絶望、および自分の煩悶である。この世界にとって、彼らはダメ人間である、過酷な現実に向かい、放縦に暮らしていましたを通して、社会へ反抗、最後に失敗した。しかし、私達は積極的から消極的に見える、彼は死の間にあっても、国が豊を願い続けた。

太宰治の作品が浮き彫りにした主人公は、豊かな物質の中で、むやみに孤独を感じながら生きているのが多い、現実には抵抗することができない。「ヴィヨンの妻」のヴィヨンにしても、「斜陽」の中の直治にしても、それでも「人間失格」の叶蔵。これらのアウトサイダ、ある程度までは、著者の化身と考えることができる。そこが「人間失格」が最も緊密になり、著者が一生、最も現実的な描写している。「人間失格」は、太宰治が生前に最後の作品を書いて、この作品は追求退廃美道路で最高の傑作と呼ばれていました。

「自分の不幸は、拒否の能力の無い者の不幸だった。すすめられて拒否すると、相手の心にも自分の心にも、永遠に修繕し得ない白々しいひび割れが出来るような恐怖におびやかされているのだった」。叶蔵は一人ぼっちって、この寂しさの本質にとってみれば、とみなさなければならない現実世界に対する无言の反発にぶつかり、夢の世界が、失望を実現することができないのは、二つの世界が完全に溶け込みの迷っていた。主人公の叶蔵を演じる生田斗真さんも「いつの時代にも、社会になじめない叶蔵のような人間がいる。破滅的な小説なのに、勇気をも らえる」と普遍性を語る。

## 2、女性への関心を高め

小さな頃から、仕事でそばにいなかった、そのため母親と疎まれてきた郁達夫。母が優しくしてくれなく、だから、母性愛がないさせてから、女性に対する認識が不足している、彼のペンが女性は、母と同じくたり、母とは同じくないたりした。

彼の小説には社会の底辺に生きる優しい女性が色濃く描写されて、愛を強く求める。例えば、「スプリング・フィーバー」タバコの工場労働者陳二妹、「南行雑感」の娼婦銀弟、「秋柳」の不器用で凡庸の娼婦カイドウ。3つの女子は不幸な人、郁達夫と同病相怜れむだった。彼女たちを助けることができるよう助けて、自分の憂鬱も軽減された。

同時に、知識の豊富な美しい女性がある。彼が王映霞や小説に描かれた女子学生「。」などを例に、彼女たちに直面して、郁達夫は見上げた、彼は、彼らの美しい顔、上品な言葉遣い、自信な態度を愛した。

太宰治は多くの女性の家庭で、一方、母は体が弱いから、小さい頃使用人と暮らしていた。その際に、太宰治は女性の本をたくさん書かれていた。太宰治は女性独別様の手法で女性とを緊密に繋がった。こんな手法が読者が女性の心理をより理解し易くさせ、もっはっきりした。この中で一番有名なのは「ヴィヨンの妻」と「斜陽」である。

「ヴィヨンの妻」妻の口調で描くご主人と奥さんの間に、お互いに理解しあえなく、女性の立場からいうなら、自分にばかり注目している男を批判しました、この本は夫婦間の距離感を描写するのを通じて、すどく虚しい社会文化の存在価値を暴露して、現代文学に批判が高まっている。

「斜陽」和子の口調で描く戦後に没落していく貴族母子の生活、すべての創造の前にまず破壊がある、と著者は説く。この作品は、戦後の日本转型期の道徳に複雑な感情を表現できる。

2人の作家の作品の中に現れた年代、女性は当時の弱者層の代表として、社会的な地位を相対的に落ちている、だから、女性に対して題材の選択に役立つ作品、還元社会の姿を忠実に再現された、思うことや考えることをさらに深化させる。

## 結語

本文は郁達夫と太宰治の比較と研究することを通して、文化の共通性を深く感得できる、彼らは異文化の薫陶と違った民族、社会の思潮、地域文化の影響を受けたの優秀な作家ども、異文化を持つ彼らとの接

触と交流することは避けられない、特に、文化的グローバル化が顕著に今日のことで、このような交流はかなり必要となっている。立派な文学作品は人類の精神文明の一部である、郁達夫と太宰治は日中両国の優秀な作家として、彼らの作品もにそれぞれが民族文明の歴史の痕跡を刻め、作品と思想が必ず永遠の光に輝くことを信じている。

**参考文献：**

- [1]陈红艳. 论郁达夫的阴柔倾向及其在作品中的表现[D]华中师范大学. 2007
- [2]王君. 太宰治与苏童颓废美对比研究[D]黑龙江大学. 2012
- [3]王向明. 孤独・颓废・情爱世界—苏曼殊、郁达夫情爱小说比较论. [A]吉首大学学报(社会科学版) 2005(4)
- [4]常清. 鲁迅、郁达夫小说比较论[D]安徽师范大学. 2005
- [5]林克勤. 环境影响创作 主题催化文风——柳永与太宰治之比较研究[A]外国语文 2009(6)